

VII 研究開発の評価

1. 適時性の視点から

(1) 「適時性」と「協働」の視点を生かして保育・学習の質を高める

ア. 適時性のとらえ方

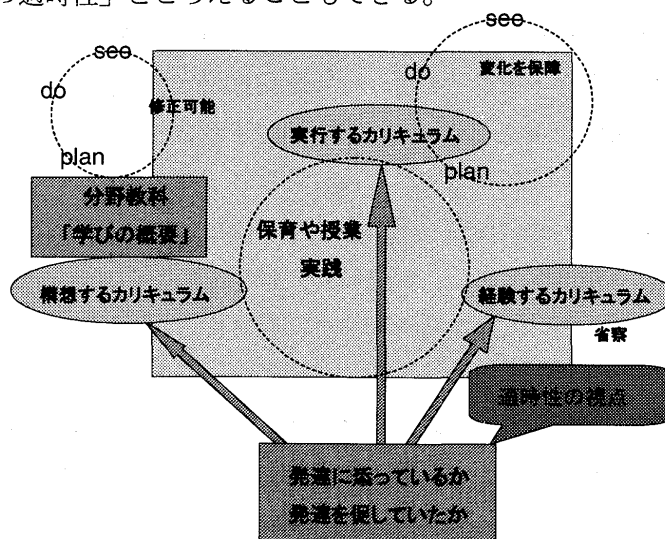
本研究では「適時性」の視点から、子どもたちの成長に即してカリキュラムを構想し、それを実施しながら修正していこうと考えている。「適時性の視点を活かす」とは「子どもの学ぶ効果や成果が高まる時期や内容」の面から、保育や学習づくりを工夫していくことである。次の2つの視点から、保育や学習づくりを高めていこうと考えている。

「発達に添う適時性」：関心が高まり、子ども自身が今やりたい学びたいと考える時期であり、自然な発達による「関心や意欲の適時性」ととらえることもできる。

「発達を促す適時性」：レディネスがある閾値に達し、それを学ぶことが可能かつ効果的になる時期であり、文化的な影響も考慮した「レディネスの適時性」ととらえることもできる。

イ. 「学びの概要」の開発

こうした考えのもと、私たちは昨年度までに『幼・小・中12年間にわたる学びの概要』（V-4. 資料（各分野・教科の学びの概要）参照）を作成した。「学びの概要」は、「協働して学びを生み出す子ども」の育成と学びにおける適時性・連続性を考慮し、子どもの学ぶ姿から資質・能力を見極めて、「学習指導要領」に変わるものとして作成した一覧である。本年度は、「学びの概要」は「構想したカリキュラム」としての位置づけを明確にし、各分野・教科ではこれ



に基づいて年間計画を作成し評価の基準として活用し（「実行したカリキュラム」）、そのふり返りを通して「経験したカリキュラム」として見直していくものとした。その際、「発達に添っているか」そして「発達を促していたか」という上述の2つの視点で行っていくことがカリキュラムの省察に有用だと考えている。

ウ. 各部会の研究の経過

各分野・教科では、小・中の分野教科部会をとおして、授業の課題設定や活動の様子等を省察したり、横断的な実態調査（各種テストやアンケート等）を実施したりするなど、各分野・教科ごとにさまざまな方法で、その見直しを進める計画であった。各部会の月例会の記録をもとに、検討の様子や、「学びの概要」の見直し等に関する主な成果などを整理すると、次のように言える。

保育：子どもたちの日々の成長を「出会い・安定／葛藤・探究／協力・創造」の3つのステージでとらえ、それぞれのステージに見合った環境構成を工夫しつつ、子どもたちの姿を分析・考察して「学びの概要」および「幼・小接続期カリキュラム」の見直しを進めた。

ことば・国語・英語：「概要」の中の「聴取・応答」と「関係把握・分析」について焦点化し、大学の科研費研究（代表・佐々木泰子）と連携して言語発達の状況を調査した。現時点ではデータ採取は終わったが分析はこれからである。「学びの概要」自体には現在のところ、特に修正はない。

市民・社会：「学びの概要」の枠組みを見直し、「価値判断・意思決定」（価値判断、調査・コミュニケー

ション、意思決定)と、「社会的事象をとらえる見方・考え方」(歴史的・地理的・政治的・経済的・文化的な見方・考え方)に変更した。その結果再編制された「学びの概要」が大きな成果といえる。

算数・数学：算数・数学の小・中接続期カリキュラムの開発が研究の中心課題になった。子どもの実態を検討しあって、必要な指導の改善や配慮を検討し、市民・社会部会とともに、接続期カリキュラム検討資料のモデルを作成した。

自然・理科：本年度は「生物分野」の「学びの概要」を開発した。「探究の柱」(自然と向き合う、究める、関わり合う)、「内容の柱」(エネルギー、物質、生命、地球)によって構成する。

うた・音楽：接続期を重点に研究が進められた。「公共性のある表現者を育てていく学習環境」「聴く・聴きあう営みを授業の中に創り出す」ことを主な課題として表現が行き交い深まっていく教室(授業)づくりを進めた。各月の部会では子どもたちが見せる姿が具体的に話し合われた。

アート・美術：アート美術の専門性が表現できているか、個々の適時性に応じた学びが保証されているか、幼・小および小・中の接続においてなめらかな接続と適切な段差があるか等の観点から、「学びの概要」を見直した。異校種教員による合同授業や、異年齢交流の授業をとおして、子どもたちの実態を把握しながら検討している。その結果「学びの概要」の枠組みが見直された。

生活文化・技術・家庭：「実践記録用紙」を作成して共通に実践した。またアンケートを実施して意識や実態の調査を行った。また「包丁使いの技」を小・中で比較検討した。アンケートからは調理実習への関心や技術の習得への達成感などが見られた。

からだ・保健体育：体力テストの結果について小6から中1へのデータの変化を検討した。現在まだ分析の整理中である。保健分野では小・中で「怒り」に関する授業を展開して、比較検討した。正当な怒りの感情の認知からモラルへ、寛容性などが検討課題にのぼった。

(2) 各分野教科部会の実践事例における「適時性」の検討と課題(発表要項の事例を中心に)

各分野教科部会の実践事例についてそれぞれの報告を検討すると、以下のような成果と課題が抽出できる。

保育

[成果] ■子どもの発達に添った適時性の実践：幼稚園での生活を「出会い・安定／葛藤・探究／協力・創造」の3つのステージで捉え、子どもが自分からやりたいことに取り組むことを最大限保証していくようにした。また各ステージにおける事例を分析・省察した。

[課題] ■さらに保育実践の省察を深め、「学びの概要」の検証・整理が求められる。

ことば・国語・英語

[成果] ■学習経験を活かす意味での適時性の実践：単元「自分新聞をつくろう」(中1)のねらいでは、小学校での学習経験を活かしつつ、学習のステップアップが実感できるように設定した。■子どもの発達にあった適時性の実践：単元「お手紙」(2年)は、この時期の子どもは、自分がそのお話の中に飛び込んで人間以外の者に成り代わることを楽しめる発達段階にある。■英語学習のレディネスとしての適時性の実践：異言語や文化に接する体験をすることから、外国語(英語)学習への自然な移行につながるのではないかという観点から設定した。

[課題] ■学習の「ねらい、学習材、方法」などが適時性・連続性という視点から子どもの実態にあっているかどうか、例えば異なる学年でも実践して検証する必要がある。■学習経験を引き出しつつも、より意識的な知識・技能として再認識したり高めたり、また小学校で学ぶべき基礎的な力を定着しておくことが求められる。

市民・社会

[成果] ■小・中接続期にこそ「身につけさせたい力」という意味での適時性の実践：単元名「世界の国～豊かな国とは何か」（中1）では、中学の学習の導入として、世界や日本の学習への興味・関心を高めること、地球儀や世界地図、統計などに親しみ、基礎となる知識や資料活用方法を身につけることをねらいとした。

[課題] ■指導者が予め学習をデザインする指標と子どもの発達段階にあった題材、また実際の授業場面での子どもの問いの扱い方をどう融合させるのかが課題として浮き彫りになった。

算数・数学

[成果] ■「なめらかな接続」と「適度な段差」を意識した適時性の実践：単元「平面図形」（中1）では、操作活動を多く取り入れたり身近な題材に気づかせるなどして、数学に対する不安感や抵抗感を減らすこと、また一方では、新しい図形の性質を論理的にきっちり説明させるなど「適度な段差」を作った。

[課題] ■自分の思考を振り返り吟味するためには他者の考えを理解し比較検討することが欠かせない。その結果、自分の考えをどのように練り直し価値あるものに変容したのかを見取ることが難しい。

■12年間全体を見通したカリキュラムづくりはまだ十分とは言えない。

自然・理科

[成果] ■子どもの興味・関心を活かす適時性の実践：単元「植物」（中1）では、肉眼で観察した後ルーペや双眼実体顕微鏡を使用してミクロな視点への第一歩を体験させ、光学顕微鏡による観察へとつなげる。

[課題] ■幼・小・中の12年間を通して身につけたい概念やスキルを見直し、適時性をふまえた学習内容を選定するという視点から、現行学習指導要領と異なる点を一層明確にするとともに、学年配列を工夫した一貫カリキュラムを作成すること。

うた・音楽

[成果] ■適時性を意識においた接続期の実践：幼・小接続期においては、幼児期からの積み重ねを意識化して、からだ全体で音を感じることを、共に「聴きあう」ことを重視した。小・中接続期の実践においては、子どもたちが自分たちの演奏に責任をもち、主体的に演奏に関わる事を小学校では重視、自分達で学んでいくための道標となるような原理原則を学ぶこと（技能の習得）を中学校では重視した。

[課題] ■小・中接続前後期で学習活動のねらいが異なることが明らかになった。■経験してきたカリキュラムを振り返り、学習方法・形態などを見直し、接続期における連続性とステップ・アップを実践化していくことが求められる。

アート・美術

[成果] ■表現することに抵抗を感じる時期を意識した実践：小・中接続期前後に、表現することに抵抗を感じる子どもの姿があることから、小学校では、美術作品を観る中で自分の好みを確認し、「自分らしさ」に向き合う実践、中学校では、「身近なものを見つめる」実践をおこない、ともに“みる楽しみ”から自然に表現活動に移行していくようにした。

[課題] ■協働した学びを導く授業づくりに焦点があり、発達を見通した適時的な学びという視点がやや弱い。■適時性視点から、さらに細かく実践を振り返ることが求められる。

生活文化・技術・家庭

[成果] ■主体的生活者を育てる実践：主体的に生活をつくるうえで不可欠な「ミニマムエッセンシャル・ライフスキル」を身につけられるように、小学校5年から中学までの学びを「生活の自立レベル」

で5段階に分け、連続した実践を志向した。また、消費者教育の実践にも力をいれた。小学校での「生活レポート」の実践を中学でも繰り返し実践することで、スパイラルな学び、その中での学びの深まりを導こうとした。

〔課題〕 ■全体のカリキュラムの連続性は十分考慮されているが、小・中接続期に焦点をあてた学びについて適時性を意識して実践していくことが求められる。

からだ・保健体育

〔成果〕 ■身体接触を重視した実践：幼小接続期では、みんなで活動することの心地よさや息を合わせることを意識づけるなど、生活とからだを通して友だちと触れ合っていくことを重視した。身体接触運動を重視して、小学校から中学校まで見通して実践した。

〔課題〕 ■小学校なりの学習の完結を見た上で、さらに運動文化の特徴を知的に理解するという形で中学において発展させていくという考え方をしているが、小・中接続のところの適時的な学びについての意識化が求められる。

(3) 「適時性」視点からの評価と課題

以上を総括して、「適時性」の視点からの研究評価として以下のことがいえる。

- 幼稚園における保育実践においては、子どもたちの日々の活動は、それぞれの子どものレディネスをふまえた自然な発露としての姿としてとらえやすい。したがって、保育者も「今支援すべきか」「今待つべきか」といった適時性の視点を反映したかかわりを取りやすい。
- 小学校・中学校の各学習分野・教科では実践づくりにあたっては「接続期カリキュラムの開発」と「協働」の視点に重点があった。
- 毎月の分野・教科部会の報告からは、「適時性の視点」からみると、横断的な調査による検討や子どもの学ぶ姿をそれぞれの教師が語り合って検討するなどの方法がとられた。ただし、横断的な調査による検討については、各分野・教科とも、分析の途上であるように読める。また、子どもの姿の考察については、部会記録には「こういう姿が見られた。それはこう意味づけられるだろう」という記述が見られるものの、その解釈・考察を「学びの概要」の見直しにどのように反映させるか（させたか）は読み取りにくい。

総括すると、次年度に向けて次の点について検討・共通理解をもって進めることが大切になる。

- 「適時性の視点」で実践や「学びの概要」を見直すというのはどういうことか、あるいはどういう方法があるか、といった点について、さらに共通理解や情報交流を進める必要がある。
- 「適時性の視点」で検討するとは、例えば「適時性の視点からみて、その内容（教材・学習活動等）をその時期に取り扱うことはどうだったか」というように、「内容・教材・学習活動」などを内省していくことが中心になるだろう。（一方、「協働」については、協働して学びを生み出す環境の工夫などととも、学習過程の検討を進めていくことが大切になるように思われる。）
- 分野・教科部会の記録のとり方について、課題に応じた項目（共通フォーマット）を設定し、それぞれの項目についてどのような検討と成果を得たかを記録していくような工夫が必要になる。

こうした点を課題としつつ、「学びの概要」を「学習指導要領」に代わる「お茶の水プラン」として構成・整理していくことを、来年度の大きな課題として研究を進めていきたい。

2. 観察・客観テスト・アンケートによる研究の評価

研究開発2年次の今年度は研究授業を重ねて研究テーマに迫ることと同時に、子どもの評価として、観察による評価・客観テストによる評価を行った。ここでは、観察による評価と客観テスト・アンケートによる評価について、その結果と考察を述べる。また、外部評価として2月に行った公開研究会で寄せられた102名のアンケートの結果とその考察も付け加える。

(1) 観察による評価

今年度評価プロジェクトでは、観察対象児をしぼり、観察記録者として本学学部学生の協力も得ながら、継続的に子どもの学びの姿を観察記録し、協働的な学びの評価を行うこととした。

ア 継続観察の実際～小1・小4の事例から～

	子どもの実態	つまずきの要因	指導上心がけたこと	3ヶ月の継続観察で見えた変容と考察
小1 T児	一人であることが多い。学級内で一緒に学習することが困難。声をかけられても自分の事としてとらえられない。	周りが見えない。自分に自信がもてない。協働的な学習体験の不足。	<ul style="list-style-type: none"> 安心して関われる友達作りを支援する。 気持ちを合わせて活動する楽しさを多く体験させる。 自信をもって自分を出せる活動を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 行動に落ち着きが出てきて一緒に活動出来るようになった。仲良しの友達が出来たことが心理的な安定をもたらしたといえる。 周りからの声かけに気付き、意識して行動出来るようになってきた。音楽会の練習に学年全体で取り組む中で、共に活動する楽しさが分かり視野も広がってきたようだ。 縄跳び運動ではみんなのお手本になって
小4 Y児	得意なことやこだわりがあることは一人でやろうとする。友達に対して関わり方の加減がわからない。ありがとうが素直に言えず、恥ずかしがり屋。注目されると嬉しそう。	自己表現の仕方がわからない。協力して学習する体験の不足。	<ul style="list-style-type: none"> 友達と協力したり一緒にいたりすることの面白さや心地よさを感じられるようにする。 自分らしさが出せて、それが認められる環境作りをする。 許容性のある協働的学習を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 飼育係として、係の仲間と協力して活動するようになった。得意な魚の飼育の面で学級の友達から認められたことが大きい。 からだ・算数・ことば等の学習では、自分から友達に働きかけたり友達からも声をかけられたりして、一緒に笑顔で活動する姿が見られるようになってきた。個の考え方や持ち味が生かされやすい学習を通して、本人にもまわりの子どもたちにも共に学び合うよさがわかってきたようだ。

イ 考察～観察による評価から見えてきた、協働的な学びを支え促す要素～

「協働」的な学びは、決して集団の中に個を埋没させる学びではない。一人一人の良さが十分発揮され認められた上で、さらに互いによりよい価値を求めて磨き合う学びである。その意味で、友達との関わり合いがうまくいかない子どもには、まずその子らしさを引き出し、自信をもってそれを出していける場・認められる場を設定することが、指導の上での出発点となること、改めた確認できた。安心して自分を出し関われる友達が身近に出来てくると、その友達を通して視野が広がり、またその友達の存在が「鏡」となって自分という存在が客観的に見えるようにもなってくる。この他者理解・自分理解が、さらに多くの仲間と自分との関係作りの基盤になっていく。その上で、関わり合って学ぶ楽しさやよさの実感が、協働して学びを生み出す原動力となっていくのだろう。

(2) 客観テストとアンケートによる評価

ここでは客観テストと子どもたちに行ったアンケートの結果から、研究の結果の一部を評価していく。本研究の性格上、一般的な客観テストでは測れない部分での子どもたちの成長が大きいと考えられるし、また、そのように期待するものであるので、ここではあくまでも子どもたちの全体像の極一部を示す指標として客観テストをとらえている。

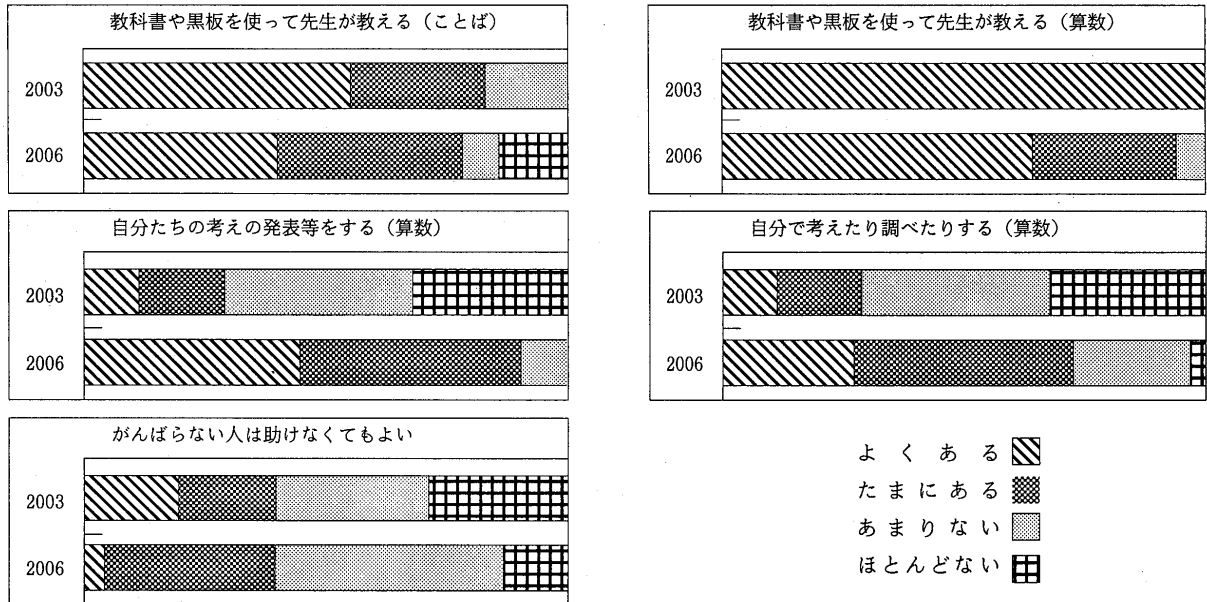
テストは小学校3年生を対象とし、JELS2003（注1）の問題を使用した。同時に同調査のアンケート項目のうち学校生活に関係があるものを抽出し実施した。これは、JELSの調査が3年前に行われており、本研究実施前と現在との比較が可能だからである。

結果はことば（国語）のテストにおいては、平均点、得点の分布ともに3年前とほぼ同じであった。算数のテストでは平均点が1点弱（17点満点）低くなっている。

一方、アンケートは以下の項目について行った。（選択肢は、よくある～ほとんどない、の4つ）

ことば、算数について「教科書や黒板を使って先生が教える」「ドリルや小テストをする」「自分で考えたり、調べたりする」「自分達の考えの発表等をする」。全体について「勉強中に、自分の考え等を伝えたい」「決まった友達グループがクラス内にある」「がんばらない人は助けなくてもよい」

この中で3年前と現在とで違いが見られた項目は以下の5項目である。



これを見ると、授業の中で子どもたちが中心となって活動する場面が増えているようである。また、「がんばらない…」の項目の変化は、状況によって判断すべきであると考えられる子どもが増えていると見てよいのかもしれない。

結果を概観すると授業の中で子どもたちが中心と活動する場面が増えているが、学力は前と同様の力がついていると言える。このことは子ども中心の活動でも学力がつく裏付けになる。今年度は限られた学年での調査であったので来年度は全学年を対象にした継続調査を実施する予定だ。

（注）お茶の水女子大学21世紀COE：「青少年期から成人期への移行についての追跡的調査

(3) 参観者のアンケートによる外部評価

平成19年2月22日(木)23日(金)幼・小・中学校合同の公開研究会が行われた。全国から3300名の参加があり、102通のアンケートが寄せられた。アンケートの項目は以下の通り。

「子どもが協働して学ぶ姿が見られましたか」では、とても見られた：31%，少し見られた：52%。

「子どもが協働して学ぶための教師の働きかけは見られましたか」では、とても見られた：38%，少し見られた：46%，と協働に関わる子どもとそれに関わる教師の姿がよく現れていると評価された。

「保育・授業の内容・方法は、子どもの発達にあっていられると思われませんか」では、とても思う：30%，まあ思う：52%，と適時性にあった内容が授業で取り入れられているとおおむね評価された。

「学びの概要は、学習指導要領の課題を改善するために参考になるところがあると思われませんか」では、とても思う：27%，まあ思う：51%，とおおむね評価されたが、「どちらとも言えない」が16%あり、課題も残った。「幼・小・中の学校間の連携は見られましたか」では、とても見られた：33%，少し見られた：57%，と言う結果になった。高い評価をいただいたが、「とてもよく見られた」が増えるように来年度、さらに実践を重ね連携が見られるようにしていきたい。

3. 研究実施上の問題点と今後の課題

(1) 協働への教師の意識が高まったが、実践上の方策が明確でない

成果 授業設計には、民主主義を担う子どもを育てるという教師の意識（異なる他者を受けとめ、聴きあう・共感や批判・葛藤場面を乗り越え、責任を果たすなど）協働への配慮、授業づくりの視点がはっきり表れた。

課題 発達段階による指導上の留意点等の違いは明らかにされていない。今後は、実践に即して具体的な方策を検討する。

(2) 子どもにとっての協働の学びの意味をさらに明らかにする（教師の力量形成）

成果 授業研究と振り返りから、子どもにとっての協働の意味や価値を次の3つに整理した。

○公共性の側面：友だちと自分の違いがわかる。違うことを排除しないで葛藤したり納得したりする。

○知性・身体性の側面：自分の知識や感覚や技能が、友だちとふれあう中で、新しい意味づけを得て深まる。

○共同性の側面：友だちと交渉しながら、いっしょに何かをつくりあげていく。

課題 「協働」をより深く理解し、指導できる教師の資質・力量形成が挙げられる。協働の評価のあり方や教員同士の省察システムづくりという開発の視点が明らかになった。

(3) 異なる校園の教師から学ぼうとする姿勢や連携の意識が高まったが、カリキュラム観の意志統一は果たせていない

成果 接続期の授業研究を多く行った結果、子どもの姿・事実を語りあうときに他校園からの声を受けとめ、次にかさそうという姿勢が深まった。事後の振り返りを大事にすることも浸透してきた。

課題 振り返るためには、授業観察記録や画像記録を残すなど、各校園の教師が互いに関わることで、それが可能な「協働システムの開発」が必要である。計画－実行だけでなく、子どもと教師の経験の全体をカリキュラムと捉える考え方はまだ浸透していない。

(4) 12年間の『学びの概要』（仮称：お茶の水プラン）

成果 適時性の2つの視点や小・中間の連続性から初年度版に見直しを加え、改訂した分野・教科もある。

課題 今年度は、「幼稚園－幼・小接続期－小学校・中学校」という形になっているが、小・中の接続期カリキュラムを開発し、実践評価とくみあわせた12年間のプランとして表す必要がある。

(5) 中学校における「適切な段差」を検討する

成果 小学校での既習経験が活かせる内容や対話的なグループ形式を取り入れ、「なめらかさ」を強調し自己効力感を高めてスタートする授業設計に効果があった。子どもたちが感じるギャップを小さくし、特に成績下位の子どもたちは安心して中学校での学習をスタートできた。

課題 「適切な段差」については、子どもの学ぶ姿に成果を語るができる教科もあったが、「発達を促す」という視点でさらなる工夫が必要である。学習面で「適切な段差（発達を促す適時性）」に配慮するというのは、学習内容・活動や指導の方法においてどのように具体化していくことなのか、本年度の実践をふり振り返り、来年度に向けた再設計を進める。

(6) 小学校における「前期」の実践をどのように変えていくのかを明らかにする

成果 今年度の「小・中接続前期」取り組みのうち、縦割り清掃のように「自分の役割を果たす」ことは、子どもの行動面からよい変化が読みとれる。

課題 「学習分野の学習において、異なる価値観や考え方を尊重する」ねらいに向けた取り組みについては、教員側に改善課題が多いことが明らかになった。教員が子ども同士の学びあいや語りあいをつなぐ指導力をもつことや、子どもの関心を触発し、つまづきを理解しながら励ます資質能力を高める必要がある。

(7) OWNプランの再検討

成果 幼・小の異学年交流で大切なことは同一メンバーが継続的に交流して学び合うのが望ましいことが明らかになっていたので、小・中でもその成果を生かそうと当初は考えたが、高学年での交流は必ずしも同一メンバーで継続的な関係を築かなくても、「知的な興味・関心でつながる」ことができ、互いに学びあえることがわかった。

課題 中学生、小学生、双方に意味のある学びをさらに生み出すために、

- 学習課題の設定
- グループの人数の配慮
- 異学年交流に向いている教科とそうでないもの

などに目を向け、小・中の教員間で、授業の内容の検討と開発を行う。

(8) 中学校「つなぐ科」

成果 子どもたちへの動機付けが高められたとともに、教員間の内容に関するディスカッションなどを通して、人を「つなぐ」ことができた。

課題 6つの視点と実践との関連、現行教科・総合との関連の明確化、3年間の系統性、評価などを明らかにしていくとともに、題材の特性や良さを、子どもの学ぶ姿で実証する。

(9) 研究組織について

課題 来年度は、関連の強いプロジェクトで、一緒に研究する方が効果の上がるものは統合する。例えば、「協働プロジェクト」と「学びの環境プロジェクト」、および「評価プロジェクト」のシステム作りにかかわる研究内容は、「協働」プロジェクトとして統合する方が良さそうである。また、「適時性プロジェクト」は、保育分野と各分野教科の関連、各分野教科同士の関連等を追求する必要があることを考えると、各分野教科の代表者による『学びの概要プロジェクト』にすることも考えられる。

研究企画委員会と各プロジェクトの連携や、研究企画委員会内の役割の明確化を進める。